

2022年2月27日 礼拝説教要旨

詩編講解説教99 「主は聖なる方」

詩編99：1～9、ヘブライ4：14～16

詩編第99編も95編から続く一連の「王の即位の歌」です。この詩編の大きな特徴としては、3節、5節、9節に「主は聖なる方」と3回繰り返されます。王である神さまは聖なるお方であるという信仰がこの歌に表されております。神さまが聖なるお方であるということは、教会においては当たり前のこと、ほとんど自明のことのように考えられております。でも改めて神さまが聖であることはどういうことなのでしょうか。わたしたちは本当に神さまを聖としているのでしょうか。

聖という言葉は、ヘブライ語でコーデシュという言葉ですが、その中心的な意味は「分離」「分ける」ということです。例えば、十戒の第四戒「安息日を心に留め、これを聖別せよ」ここにもコーデシュが使われていますが、「聖別」という訳語が当てられます。キリスト者にとって日曜日は他の日とは違います。特別な日、神さまに献げる日です。サンデーベストという言葉がありますが、「大草原の小さな家」に出てくるインガルス家族のように日曜日には一番よい服を着て、身だしなみを整えて礼拝に行く。それだけこの日を特別な日として重んじているということの表れです。また先日、長老会で新年度の予算案を審議した時に献金の話になりました。ある長老がいただいた給料の中から献金を特別に取り分けるという話をされました。これはとても大切なことです。個人的なことで恐縮ですが、わたしも献金として献げるお金は準備しています。きれいな、できれば新券を用意いたします。新券ではなくても、きれいなお札を取り分けておく。皆さんも経験があると思いますが、時々、財布の中にきれいなお札が混じっていることがある。それを献金用として取り分けておくのです。そのようにして神さまを聖とすることを身をもって学ぶのです。そうでもしなければ、わたしたちは日曜日を単にこの世の延長線上に考えるでしょう。この世の生活の一部分のように感じてしまうでしょう。でも本当はそうではありません。特別なのです。わたしたちは神さまをそのように特別なお方として見ているのでしょうか。そのことが問われています。

今日のところにモーセの名前が出てきます。「主の祭司からはモーセとアロンが、御名を呼ぶ者からはサムエルが主を呼ぶと主は彼らに答えられた」（6節）モーセの話で思い出すのは、彼の召命の話です。燃える柴の間から神さまが声をかけられた。「モーセよ、モーセよ」モーセが近づいて行くと神さまは「ここに近づいてはならない。足から履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから」（出エジプト記3：5）と言われます。近づいてはならない。神さまが臨在される場所は聖なる場所だから。神さまはそのように近づきたいお方なのです。今日の詩編で言えば、1～3節のところにあるイメージがそうでしょう。「諸国の民よ、おののけ」（1節）「御名の大きいなること、畏るべきことを告白せよ」（3節）ここに神さまが聖なるお方であり近づきたいお方であることが示されております。

ではどうして近づきたいのでしょうか。その根底には創造主と被造物の決定的な違いがあります。全てをお造りになられたお方と、造られた被造物との間には当然ながら超えがたい隔たりがあります。日本を代表する神学者の一人高倉徳太郎はその著書『福音的キリスト教』の中で近代以降の人間中心的なキリスト教の傾向を批判して「現代のキリスト教は、創造主なる神と被造物たる人間との聖なる境界線をぼかし、もしくは無視せんとしている」と警戒しています。

そうなる「キリスト教は享樂的になり、功利的になり、良心宗教になって、その真剣さが失われる」と。つまりキリスト教が単なるこの世の倫理、人間的な教えにとどまってしまい、魂の救いまで至らないということでしょう。そこでは造り主である神さまとの出会いという人間存在の根拠そのものを見失うおそれがあります。

もう一つ、神さまが近づきたいお方である理由としてやはり人間の罪の問題を考えなければなりません。8節「我らの神、主よ、あなたは彼らに答えられた。あなたは彼らを赦す神、彼らの咎には報いる神であった」とあります。「報いる」という言葉は「罰する」と訳すこともできます。この言葉の背景には、そこに罰すべき事柄があるということです。それは言うまでもなく人間の罪のことです。99編にはモーセとアロンが出てきますが、そこで思い起こすのは、エジプトから救い出されたイスラエルの民が金の子牛を拝んだ話です。モーセがシナイ山で神さまから十戒をいただいていた時、イスラエルの人々はモーセがいなくなったと思い、アロンに自分たちを導く神の像を作るように要求します。そこでアロンは金の子牛を作ってこれを拝むようにいたしました。それは偶像礼拝の罪です。そのようにわたしたちは目先のことに心を奪われ、造り主であり、救い主であるお方を見失ってしまいます。そして事もあろうに生ける神さまではなく、物言わぬ偶像を神として拝んでしまう。そのようなわたしたちが神さまに近づくことができないのは当然なのです。

けれどもそのようなわたしたちを神さまは赦し歩み寄ってくださいます。「主の祭司からはモーセとアロンが、御名を呼ぶ者からはサムエルが、主を呼ぶと主は彼らに答えられた」（6節）ここに登場してくるモーセとアロン、サムエルは旧約聖書の人物ですが、神さまと人間との間に立つ中保者的な存在でした。モーセとアロンは祭司として神さまと民との間に入りました。またサムエルは預言者として神さまの言葉を人々に語ります。「しもべは聞きます。主よ、お話しください」（サムエル記上3：10）というサムエルの言葉はよく知られているでしょう。そのようにして中保者が立ち、御言葉によって神さまと人間との関係を取りもちました。でもモーセもアロンもサムエルも弱くそれは完全な中保、執り成しとはなりません。

だからこそ神さまは完全な中保者、生ける神の言であるイエス・キリストをお遣わしになりました。「あなたは彼らを赦す神、彼らの咎には報いる神であった」（8節）この詩編の御言葉はイエス・キリストによって成就しました。主がわたしたちの咎の報い、神さまの罰を引き受けてくださり十字架で死んでくださいました。その贖いによって神さまはわたしたちを赦されました。それゆえ「我らの神、主をあがめよ。その聖なる山に向かってひれ伏せ」（9節）とあるように、わたしたちは神さまのご支配の中に迎えられ、神さまに礼拝をささげることができるのです。

ヘブライ人への手紙に「だから、憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために、大胆に恵みの座に近づこうではありませんか」（ヘブライ4：16）とあります。神さまとわたしたちの間にはもちろん超えがたい隔りがありますが、キリストがわたしたちを執り成してくださったからこそ、わたしたちは神さまの御名を呼び、大胆にも聖なるお方に近づくことができます。でもこの恵みはわたしたちを決して傲慢にはさせないでしょう。いよいよ謙虚に御前にひれ伏し、神さまを重んじ、神さまを聖とする生活へとわたしたちを促すに違いありません。